

## 印欧語における中・受動態動詞の先史

—ヒッタイト語からの新たな根拠—

吉 田 和 彦

(京都大学)

キーワード：印欧語，ヒッタイト語，アナトリア諸語，中・受動態動詞，  
史的形態論

### 0. はじめに

比較言語学の課題は、同系統に属する諸言語の共通の祖先である祖語を再建し、個々の言語が祖語の段階からどのような変化を被って成立したのかを明らかにすることにある<sup>1)</sup>。言うまでもなく、再建される祖語というものは分派諸言語のあいだにみられる対応を合理的に説明するための理論的要請である。したがって、新しいデータの発見やより優れた方法論の導入によってつねに改変されるものである。祖語に内在するこの性格は、比較研究のどの分野であれ、その発展を歴史的に顧みれば容易に理解されるであろう。

本稿は、印欧語中・受動態動詞を考察の対象とする。そして、一般に受け入れられているその印欧祖語でのパラダイムが部分的に修正されなければならないことを主張する。この主張を裏づける決定的な根拠となるのは、ヒッタイト語に代表されるアナトリア諸語にみられる事実、とりわけ文献学的な観点からの粘土板の時期区分（古期，中期，後期ヒッタイト語）によって明らかになるヒッタイト

1) 本稿は京都大学言語学懇話会第69回例会（京大会館，2005年12月）における発表に補筆したものである。ここで示そうとする知見の一部は、The 24th East Coast Indo-European Conference（カリフォルニア大学パークレー校，2005年6月）と6<sup>o</sup> Congresso Internazionale de Ititologia（ローマ大学，2005年9月）においても発表した。これらの会議の参加者、とりわけJay Jasanoff, Craig Melchert, Norbert Oettingerとの意見交換はたいへん有益であった。また『言語研究』のお二人の査読者の方々からも貴重なご意見をいただいた。あわせて、あつく感謝申し上げたい。

語内部での中・受動態動詞の歴史である。

以下の議論においては、収集した言語データとそれに対して施した歴史比較言語学的な解釈をできる限り切り離して提示するように配慮した。情報を求めている読者、あるいはデータからみずからの解釈を引き出そうとする読者には、このような提示のしかたが望ましいと思えるからである。

## 1. 問題の所在

印欧祖語の時期に中・受動態動詞がどのような語尾によって特徴づけられていたかという問題は、能動態動詞の場合にくらべると、容易ではない<sup>2)</sup>。しかしながら、以下の代表的な印欧諸語のあいだにみられる対応から、一次語尾として 1 sg. \*-h<sub>2</sub>er, 2 sg. \*-th<sub>2</sub>er, 3 sg. \*-or, \*-tor, 3 pl. \*-ntor, \*-ro(r) が<sup>3)</sup>、二次語尾として 1 sg. \*-h<sub>2</sub>e, 2 sg. \*-th<sub>2</sub>e, 3 sg. \*-o, \*-to, 3 pl. \*-nto, \*-ro が一般に再建されている (たとえば Fortson 2004: 86 や Yoshida 2004: 177 を参照)<sup>3)</sup>。

### 中・受動態一次語尾

	印欧祖語	ヴェーダ	ギリシア語	ラテン語	トカラ語 B	ヒッタイト語
sg. 1	*-h <sub>2</sub> er	-e	-μαι	-or	-mar	-ba(ha)(ri)
2	*-th <sub>2</sub> er	-se	-σοι	-re, -ris	-tar	-ta(ri)
3	*-or, *-tor	-te, -e	-τοι	-tur	-tār	-a(ri), -ta(ri)
pl. 3	*-ntor, *-ro(r)	-nte, -ate, -re	-ντοι	-ntur	-ntār	-nta(ri)

### 中・受動態二次語尾

	印欧祖語	ヴェーダ	ギリシア語	ラテン語	トカラ語 B	ヒッタイト語
sg. 1	*-h <sub>2</sub> e	-i, -e	-μᾶν	-(o)r	-mai	-ba(ha)t(i)
2	*-th <sub>2</sub> e	-thās	-σο	-re, -ris	-tai	-ta(t)(i)
3	*-o, *-to	-ta, -at	-το	-tur	-te	-a(t)(i), -tat(i)
pl. 3	*-nto, *-ro	-nta, -ata, -ran	-ντο	-ntur	-nte	-ntat(i)

2) 印欧祖語には能動態と中・受動態という2つの態の区別があった。このうち、中・受動態は中動と受動の意味を同一の形式で表していた。

3) 1人称と2人称の複数語尾、および双数語尾については不明な点が多いため、ここでは扱わない。一次語尾は現在に、二次語尾は過去に言及する形式である。なおギリシア語としてあげたのはアルカディア・キュプロス方言の形式である。Meillet (1937: 232f.) は 1 sg. \*-ai, 2 sg. \*-sai, 3 sg. \*(t)ai という語尾を再建しているが、これらの再建形では、Meillet の時代以降に研究が進化したトカラ語やヒッタイト語の事実に対して、合理的な説明を与えることができない。

中・受動態一次語尾と二次語尾の区別は、本来一次語尾にのみ付与されていた小辞 \**r* によってなされていた。この点で、\**r* は能動態動詞の一次語尾にみられる小辞 \**i* と機能的には類似している（一次語尾 1 sg. \**-mi*, 2 sg. \**-si*, 3 sg. \**-ti*, 3 pl. \**-enti* に対して、二次語尾 1 sg. \**-m*, 2 sg. \**-s*, 3 sg. \**-t*, 3 pl. \**-ent*）。印欧祖語に遡る \**r* を持つ一次語尾は、ラテン語とトカラ語、さらに二次的な形態変化を部分的に受けているが、ヒッタイト語と古期アイルランド語（1 sg. \**-ur*, 2 sg. \**-ther*, 3 sg. \**-dar*, 3 pl. \**-tar*）に保持されている<sup>4)</sup>。これに対して、ヴェーダやギリシア語、それにゴート語（1 sg. \**-da*, 2 sg. \**-za*, 3 sg. \**-da*, 3 pl. \**-nda*）では、\**r* は能動態にみられる \**i* に二次的に取って代わられた。さらにほとんどの分派諸言語では、小辞 \**r* を除いた中・受動態語尾自体も、対応する小辞 \**i* を除いた能動態語尾 1 sg. \**-m*, 2 sg. \**-s*, 3 sg. \**-t*, 3 pl. \**-ent* からの形態的な影響を受けている。この影響はギリシア語にもっとも顕著にみられる（1 sg. \**-μαι*, \**-μᾶν*, 2 sg. \**-σο(ι)*, 3 sg. \**-το(ι)*, 3 pl. \**-ντο(ι)*）。他方、ヒッタイト語では起源的な中・受動態語尾 1 sg. \**-h<sub>2</sub>e*, 2 sg. \**-th<sub>2</sub>e*, 3 sg. \**-o*, \**-to*, 3 pl. \**-nto* の特徴がかなり忠実に保存されている<sup>5)</sup>。

うえの中・受動態動詞パラダイムの3人称単数の位置には、\**-o(r)* と \**-to(r)* という2つの語尾が含まれている。これら2つのうち、\**-o* のほうがより古く、\**-to* は対応する能動態3人称単数語尾 \**-t* の影響を受けて二次的につくられたと考えられる。大多数の分派諸言語においては、この二次的な \**-to* が本来の \**-o* に代わって広がっていて、たとえばギリシア語、ラテン語、ゲルマン諸語では古い \**-o* という語尾は完全に駆逐されている。しかしながら、アナトリア諸語、ヴェーダ、古期アイルランド語では、部分的に \**-o* も存続している。ヒッタイト語では、*eša(ri)* ‘sits’ や *kiša(ri)* ‘becomes’ などにみられるように、かなり多くの中・受動態動詞が a-クラス (<\**-o*) に属する。ヴェーダでも *śaye* ‘lies’ や *duhe* ‘milks’ など、*-e* (<\**-o+i*) によって特徴づけられる中・受動態動詞がかなり残っている<sup>6)</sup>。本来の \**-o* は、古期アイルランド語の受動形、たとえば *-berar* ‘is car-

4) ラテン語と古期アイルランド語では *-r* は二次語尾にも広がっている。

5) バルト語派とスラブ語派では、印欧祖語に遡る中・受動態は完全に消失している。

6) 未完了過去の *aśayat* ‘lay’ や *aduhāt* ‘milked’ などは能動の *-t* が後置された不規則な形式であるが (<\**-o+t*)、やはり古い \**-o* を保存している。

ried' などにもみられる。また、\*-o を継承する貴重な残存形式として、トカラ語 B のコンピュータ ste 'is' (<sth<sub>2</sub>-o) もあげることができる。

この古い中・受動態 3 人称単数語尾 \*-o を取る動詞に対して、状態動詞 (stative, Stativ) というカテゴリーを提案する研究者がいる<sup>7)</sup>。これらの研究者によれば、この状態動詞は \*-to という語尾を取る非状態動詞とのあいだで機能的な相違を示すという。しかしながら、この提案は受け入れがたい。なぜなら、ḥattari 'strikes', paršija 'breaks', ḥalzija 'calls' といったヒッタイト語の a-クラスの中・受動態動詞は瞬間性を表しており、通常のいかなる意味においても状態動詞とは言えないからである<sup>8)</sup>。Jasanoff (2003: 51) はヴェーダの brūte (<\*-to+i) 'invokes' と bruve (<\*-o+i) 'is called' のようなペアをあげて、「\*-o による古い形式と \*-to による新しい形式が後期印欧祖語の時期に共存するとき、後者は純粋な中動の意味を担うのに対して、前者は受動もしくは自動詞の機能を帯びて存続する可能性がある」と述べている。「いわゆる 3 人称単数の状態動詞とよばれるものは、\*-o が \*-to に移行する際に特定の動詞にみられる一時的な結果であり、印欧祖語の時期に中動態と別個の二次的な受動態が成立したという根拠はない」という Jasanoff の言明に筆者が付け加える点はほとんどない。

うえの議論から、中・受動態 3 人称単数語尾の \*-o と \*-to の関係は機能的なものではなく、歴史的なものと考えられる。ところで、これら 2 つの語尾は、さきの中・受動態動詞パラダイムからも明らかなように、印欧祖語の時期に存在したものとして両方ともに再建されている (Watkins 1969: 84, Jasanoff 2003: 48f.)。\*-o が \*-to になる形態変化が祖語の段階で生じ、両者が並存したとする一般的な見方は、新しくつくられた \*-to がすべての分派諸言語にみられるために、ごく自然のように思えるかもしれない。しかしながら、一見まったく率直と思えるこの見方に対して、根本的な疑いを投げかける新たな事実がヒッタイト語内部に見いだされるのである<sup>9)</sup>。

7) この立場を取るもっとも代表的な研究は、Oettinger (1976, 1993), Rix (1977), Kortlandt (1979), Kümmel (1996), Gotō (1997) などにみられる。

8) Pooth (2000: 112) は、ヴェーダとアヴェスタにおいても \*-o と \*-to のあいだには機能的な差異がないと述べている。

9) 本稿では、\*-jé/ó- や \*-ské/ó- という本来現在語幹を形成する接尾辞を持つ中・受動態動詞は扱わない。それらには、おそらくまったく違った歴史があるに違いない。

## 2. ヒッタイト語内部の興味深い事実

ヒッタイト語の中・受動態動詞は a- クラスと ta- クラスに分かれる。前者は 3 人称単数形において -a (<\*-o) という語尾を取るのに対して (e.g., eša(ri) 'sits', kiša(ri) 'becomes'), 後者は -(t)ta (<\*-to) という語尾を取る (e.g., arta(ri) 'stands', lukkatta 'dawns'). a- クラスと ta- クラスのあいだには機能的な違いはない。また、形式的な違いも 3 人称単数形にしかみられない。個々の中・受動態動詞の a- クラスあるいは ta- クラスへの帰属には概して揺れがみられないが、a- クラスから ta- クラスへの移行を示す若干の例がヒッタイト内部の歴史にみられることが Watkins (1969: 85f.) によって指摘されている。この中・受動態 3 人称単数形にみられる形態変化について、Watkins は 2 つのタイプを認めている。ひとつは -a という語尾が -ta に取って代わられる変化 (-a → -ta) であり、もうひとつは古い -a という語尾に新しい -ta という語尾が付与される変化である (-a → -atta)。後者の形態変化が生じるためには、前者の形態変化によってすでに -ta がつくられていることが前提となる (-atta < -a+(t)ta)。-a → -ta という形態変化の例として Watkins があげているのはつぎの 3 つである<sup>10)</sup>。

kija (<\*kej-o) → kitta(ri) (<\*kej-to) 'lies'  
 eša, ešari 'sits' → eštari  
 tuḫša, tuḫša[ri] (OH) 'cuts off' → tuḫḫušta (OH+)

しかしながら、うへの例のうちのはじめの 2 つは誤った解釈に基づいている<sup>11)</sup>。ヒッタイト語には 'lies' を意味する中・受動態動詞 kija は存在しない。Watkins があげている kija は、代名詞 kī に後倚辞 -ja 'and' が付与された形式である<sup>12)</sup>。

10) 略語一覧：OH= 古期ヒッタイトのオリジナルの粘土板，OH+= 古期ヒッタイトテキストの中期ヒッタイトの時期のコピー，OH++= 古期ヒッタイトテキストの後期ヒッタイトの時期のコピー，OH-= 古期ヒッタイトテキストであるが、記録された時期が不明の粘土板，MH= 中期ヒッタイトのオリジナル，MH+= 中期ヒッタイトテキストの後期ヒッタイトの時期のコピー，MH-= 中期ヒッタイトテキストであるが、記録された時期が不明の粘土板，NH= 後期ヒッタイトテキスト。

11) すでに Oettinger (1976: 143) と Hart (1980: 7) によって指摘されている。

12) Watkins と同様の誤った分析が Mottausch (2002: 8) によってもなされている。ヒッタイト語には t を持つ新しい kitta(ri) しかないが、リュキア語には \*kej-o → \*kej-to という形態変化が sijēni (sijēni) 'lies' と sitēni 'id.' のあいだに反映されている。また、楔形文字ルウィ語 zījar(i) は t を欠く古い \*kej-o を反映している。García Castellero

また2番目の例の eštari については、Watkins はヴェーダ āste ‘sits’ やギリシア語 ἴσται ‘id.’ に対応すると考えているが、実際には3人称単数ではなく、2人称単数の形式である。しかしながら、-ta を持つ新しい形式は現在形ではなく、過去形に見られる。-a を持つ ešati ‘he sat’, ešat などに対する eštat と ēštat がその例である（これらの例は Watkins 自身も指摘している）。一方、Watkins の3番目の例は -a → -ta という形態変化を支持するよい例である。t のない tuḥša と tuḥš[a]ri が古期ヒッタイト語のオリジナルの粘土板に記録されているのに対して、-ta を持つ tuḥḥušta は古期ヒッタイト語のテキストの中期ヒッタイト語の時期のコピーに書かれている。

2つめの形態変化 -a → -atta の例として Watkins があげているのは以下のとおりである。

ḥuittija(ti) (OH) ‘pulled’ → ḥuittijatta(t) (NH)

ḥālija, ḥālijari (OH++) ‘kneels down’ → ḥālijattat (NH)

laḥuqāri (OH++) ‘pours’ → laḥuqatari (jh)<sup>13)</sup>

ḥalzija (OH) ‘calls’ → ḥalzijatari (OH++)

最初の例においては、古期ヒッタイトのオリジナルの粘土板では a- クラスの ḥuittija(ti) が記録されているが、後期ヒッタイト語では ta- クラスの ḥuittijatta(t)

(2001) は、t を持たないリュキア語 sijeni と楔形文字ルウィ語 zījar(i) に対応するサンスクリット語 śaye を現在語幹と完了の中・受動態語尾との混成とみなしている。

13) Mainz の Silvin Košak によるヒッタイトテキストのオンライン・コンコーダンスで使われている略号：ah=althethitisch, mh=mittelhethitisch, jh=junghethitisch, sjh=spätjunghethitisch。ただし、これらの略号には粘土板が実際に記録された時期についての情報しか含まれていない。本稿では、可能な限りテキストが作られた時期も示すように心がけた。

この3番目の後期ヒッタイト語のテキストに記録されている laḥuqatari については、若干のコメントを施したい。この形式は一字ごとに翻字すると la-ḥu-qa-ta-ri となるが、3字目の qa の字形が奇妙である。Friedrich (1991: 125) は疑問符付きで laḥuqatari と転写している。これに対して、Puhvel (2001: 18) は特に補足的な説明をせずに、la-ḥu-qa-ta-ri ではなく、la-ḥu-ut-ta-ri と読むべきであると述べている。また Güterbock and Hoffner (1980: 13) は疑問符つきで la-ḥu-ut<sup>2</sup>-ta-ri と読んでいる。筆者の判断では、la-ḥu-ut-ta-ri の可能性が高いように思える。その理由は、対応する過去形 laḥuttat、それに Puhvel によると未公開の粘土板 (829/z) に書かれている la-a-ḥu-ut-ta-ri (2x, NH) は、la-ḥu-ut-ta-ri と整合的であるからである。もし正しい読みが la-ḥu-ut-ta-ri であるなら、この例は -a → -atta ではなく、-a → -ta という形態変化の例となる。

に取って代わられている。残りの3つの例についても、-a → -atta という形態変化のパターンがみられる。

以上が Watkins によってあげられた例である。しかし実際にヒッタイト語テキストを調べてみると、-a → -ta と -a → -atta という形態変化を示す例が他にも数多くあることが分かる。まず以下に示すのは -a → -ta の追加例である<sup>14)</sup>。

šuppījahḫati (OH) ‘cleaned’ → šuppījaḫtari (mh)

paḫšari (MH) ‘protects’ → paḫḫaštāt (NH)

šiumījahḫati (OH+) ‘was smitten (with disease)’ → šiumījaḫta (OH++)

šuppari (date indeterminable) ‘sleeps’ → šu-up-ta<sup>1</sup>-ri (sjh)<sup>15)</sup>

karša (jh) ‘cuts’ → karaštari (OH++)

uaššari (jh) ‘is favorable’ → uaštari (jh)

最初の例では、古期ヒッタイト語のオリジナルの粘土板に記録されている -a を持つ šuppījahḫati が、中期ヒッタイト語では -ta を持つ šuppījaḫtari に取って代わられている。同様に、2番目の中期ヒッタイト語の -a を持つ paḫšari は、後期ヒッタイト語では -ta を持つ paḫḫaštāt に変化している。残りの4例においても、同じパターンがみられる。古期ヒッタイト語の中期ヒッタイトにおけるコピーでは -a を持つ šiumījahḫati が記録されているのに対して、古期ヒッタイト語の後期ヒッタイトにおけるコピーでは -ta を持つ šiumījaḫta になっている。時期不明の粘土板に書かれている šuppari は -a を示しているのに対して、-ta を持つ šu-up-ta<sup>1</sup>-ri は後期ヒッタイト語末期の粘土板に書かれている。最後の2例については、すべての例が後期ヒッタイト粘土板に記録されているが、-ta を持つ形式は二次的につくられたに違いない。

つぎに、-a → -atta の追加例は以下のとおりである。

14) データの収集においては、Neu (1968) と Yoshida (1990) に整理されているデータを主に参考にした。

15) šu-up-ta<sup>1</sup>-ri の3番目の文字は、実際には ta ではなく、ša である。ta と ša は非常に字形が似ているために、ša と書かれているのは書記の誤りにちがいない。

- iškallāri (OH+) ‘tears up’ → iškallatta (MH+)  
 ḥannari (OH++, MH) ‘decides’, ḥannat (OH+) →  
   ḥannat<sup>16)</sup> (date indeterminable)  
 nēari (OH++) ‘turns’, nēat (MH), nēja (MH), nejat (OH++, MH+) →  
   nejattat (OH++), etc.  
 LUGAL-izziat (NH) ‘reigned as a king’ → LUGAL-izzijatta (jh)<sup>17)</sup>

最初の例では、古期ヒッタイト語の中期ヒッタイトにおけるコピーに記録されている iškallāri が中期ヒッタイト語の後期ヒッタイトにおけるコピーでは -ta を持つ iškallatta に取って代わられている。同じパターンが残りの3例にもみられる。ḥannat<sup>16)</sup> が記録されている粘土板の時期は不明であるが、後期の時期と考えるとよい言語学的根拠がある。それは、簡略綴りがみられる点、および過去語尾に付与されている小辞が古期ヒッタイトに特有の -ti ではなく、apocope を受けた二次的な -t である点である<sup>18)</sup>。

関与している形態変化が -a → -ta なのか、あるいは -a → -atta なのかが確定し難い例もある。つぎの5つの例をいずれかに分類することは容易ではない。

- a[rg]a (MH+) ‘mounts’ → arkatta (OH+)  
 ḥinga (OH) ‘bows’ → ḥinkatta (OH++)  
 paršija (OH) ‘breaks’ → paršittari (MH+)  
 šijāri (OH++) ‘squeezes’ → šijēttari (jh)  
 lagāri (OH++, MH) ‘bends’ → lagāttari (jh)

はじめの2例、a[rg]a → arkatta と ḥinga → ḥinkatta については、それぞれの動

16) ḥannat<sup>16)</sup> が ḥannattat と綴られていない理由は言語学的なものではなく、おそらく画数の多い文字 at を省略した簡略綴りによると考えられる (ḥa-an-na-at-ta-at → ḥa-an-na-ta-at)。簡略綴りは古期ヒッタイト語では稀である (Yoshida 1998a: 607 を参照)。

17) LUGAL-izzijatta (jh) 以外に、LUGAL-uizzittat (MH+) という形式も記録されている。後者はおそらく前者に syncope が働いた結果、つくられたものと考えられる。アクセントの落ちない母音が消失することは、ヒッタイト語にしばしば観察される。

18) この i-apocope が後期ヒッタイト語の特徴であることについては古くから指摘されていた (Friedrich 1960: 79)。詳しくは Yoshida (1987) を、また小辞 -ti の起源については Yoshida (2001) を参照。



詞語幹 *arg-* と *hink-* が 2 子音連続で終わっている。また、音節文字である楔形文字は、その表記上の制約から語中の 3 子音連続を書き表すことができない<sup>19)</sup>。したがって、*arkatta* と *hinkatta* にみられる語尾 *-tta* の直前の *a* が実際に存在していたのか、あるいは表記上のものなのかを判断することはできない。もしその *a* が実際に読まれていたとするならば、これらの 2 例は *-a* → *-atta* という形態変化を受けていることになる。3 つめの例の *paršittari* は不可解である。 *paršija-* は *\*-je/o-* という接尾辞を持っているが、*\*-je/o-* で特徴づけられる中・受動態動詞は一般に *-a(ri)* ではなく、*-tta(ri)* という 3 人称単数語尾を取る (cf. Jasanoff 2003: 50)。これに反して、*paršija-* の 3 人称単数中・受動態は *paršija(ri)* であり、予想される *paršijattari* は一例もない。そして実際に記録されている *t* を持つ形式は、この例にみられる *paršittari* しかない。この *paršittari* はおそらく syncope によって *paršijattari* からつくられたのであろう<sup>20)</sup>。4 つめの例に含まれる *šijëttari* は、*-ttari* の前に *a* ではなく *e* を持っている点で不規則である。おそらく対応する能動態の *šiezzi* からの形態的な影響を受けたと考えられる。5 つめの *lagäittari* も *-ttari* の前に *a* ではなく *ai* がある点で不可解である。 *lag-* の能動態は *hi-* 動詞であり、その 3 人称単数形は *läki* である。 *hi-* 動詞 3 人称単数語尾は一般に *-i* であるが、若干の動詞は *-ai* という語尾も取る<sup>21)</sup>。 *lag-* については *läki* のみしかないが、おそらく *lägai* が記録にないのは偶然であると考えられる。なぜならここで問題としている中・受動態の *lagäittari* は、能動の *lägai* に後期ヒッタイト語において生産的な中・受動態語尾 *-ttari* が付いたと考えることによって、もっとも自然に理解されるからである<sup>22)</sup>。

19) 楔形文字は V, CV, VC, CVC のいずれかの構造を持つ。

20) Craig Melchert からの指摘による。この動詞のアクセントが接尾辞ではなく、語根にあったということは、古期ヒッタイト語には *paršija* しかなく、*paršijari* が記録されていないことから裏づけられる。

21) *malli 'grinds'* に対する *mallai* など。詳しくは Jasanoff (2003: 65) を参照。

22) *lagäittari* の歴史については、Yoshida (forthcoming a) で詳しく分析されている。なお、*lagäittari* に対するのと類似した解釈が *išhuqaitt (mh) 'scattered'* (<\*h<sub>2</sub>f-sh<sub>2</sub>u-o; cf. Melchert 1984: 99) に対しても与えられる。 *išhuqa-* は *hi-* 動詞で、その 3 人称単数現在形は *išhuqai*, *išhuqāi*, *išhūqai*, *išhūqāi* である。さらに 3 人称単数過去形として *išhuqāš* 以外に、*išhuqāiš* もある。この場合、*išhuqai-* が新しい語幹として再解釈されたに違いない。この *išhuqai-* に中・受動態 3 人称単数過去語尾 *-ttat* が付与されてつくられたのが、うへの *išhuqaitt* だと考えられる。

以上に示してきたように、Watkins があげたもの以外にも、 $-a \rightarrow -ta$  と  $-a \rightarrow -atta$  という形態変化の例は数多くみられる。この事実から引き出される明らかな解釈は、これらの2つの形態変化はヒッタイト語の歴史時代にもなお進行中であったということである。

つぎに、ヒッタイトの歴史時代の初めから  $-ta$  もしくは  $-atta$  を持ち、決して  $-a$  で特徴づけられていない中・受動態動詞を検討する。本論末の補遺に、ヒッタイト語中・受動態動詞の  $a$ -クラスと  $ta$ -クラスへの分類が示されている。後者には、 $-ta$  を持つものと  $-atta$  を持つものが含まれている。一瞥しただけで、 $-ta$  を持つ中・受動態動詞のほうが  $-atta$  を持つ中・受動態動詞よりも数のうえで多いことが分かる。 $-ta$  を持つ中・受動態動詞のなかには、一見  $-atta$  を持っているようにみえるものが5例ある。

ḫulla- ‘combat’: ḫulattati, ḫullattat  
 luk(k)- ‘dawn, get light’: pres. lukkatta  
 tarna- ‘let, leave’: tarnattari  
 duḡarnai- ‘break, tear to pieces’: duḡarnattari  
 ija- ‘march’: pres. ijatta

はじめの4つの動詞語幹からは、ḫul(l)attat(i), lukkatta, tarnattari, duḡarnattari という3人称単数形がつくられるが、いずれも  $-atta$  を持っているように受け取れる。しかしながら、いずれの例においても  $-tta$  の前の  $a$  は語尾ではなく、語幹末母音である<sup>23)</sup>。したがって、これら4つは  $-atta$  ではなく、 $-tta$  で特徴づけられることになる。最後の  $ija$ -については、最もよく用いられている中・受動態3人称単数形は  $ijatta$  である。しかしながら、この  $ijatta$  は二次的な形式であり、古期ヒッタイト語にはより古い  $iētta$  が記録されている。この  $iētta$  を Melchert (1984: 19) は、Watkins (1969: 199) にしたがって、幹母音  $-e$ -を取るようになった  $*h_1j_1-é-to$  から導こうとする。しかしながら、 $*h_1éj_1-to$  という祖形を直接反映し

23) これら4つの動詞に対して、Melchert はつぎの歴史的説明を与えている。  
 ḫul(l)attat(i) <  $*h_{2/3}l_1-ne-h_1-$  (cf. Melchert 1994: 55), lukkatta < causative  $*-éje/o-$  (cf. Melchert 1984: 16), tarnattari <  $*t_1(K)neh_2-$  (cf. Melchert 1994: 167), duḡarnattari < denominative  $*-je/o-$  (cf. Melchert 1984: 36).

ており、語頭の i は 3 人称複数 *iēnta* から二次的にもたらされたとする分析も十分に可能である。いずれの分析を取るにせよ、*iēnta* は *-atta* ではなく、*-ta* を持っている。

うえの 5 例を除いたうえで、疑いなく *-atta* という語尾を持っている例をつぎに検討する。すでに *-a* → *-atta* という形態変化によって歴史時代に二次的につくられた *-atta* の例をうえでみたが (*huittijatta(t)*, *ħaliġattat*, *ħalzijattari*, *iškallatta*, *ħannatat*, *nejattat*, *LUGAL-izzijatta*)、それらのいずれも古期ヒッタイトのオリジナルの粘土板には記録されていなかった。残りの *-atta* の例を以下に示す。

*ħarra*- ‘crush’: *ħarrattari* (MH), pret. *ħarratta* (mh)<sup>24</sup> (< \**h<sub>2</sub>érh<sub>3</sub>-o-*; cf.

Melchert 1994: 79)

*šarra*- ‘break’: pres. *šarratta* (OH++), *šarrattat* (mh) (< \**sérh<sub>2</sub>-o*)

*tarra*- ‘be able, can’: pres. *tarratta* (OH+), *tarrattat* (NH) (< \**térh<sub>2</sub>-o*; cf.

Melchert 1994: 79)

*zinna*- ‘end, finish’: *zinnattari* (OH++), *zinnat[t]at* (jh) (< \**si-n-h<sub>1</sub>-o-*; cf.

Melchert 1994: 80)

*šanna*- ‘conceal’: pres. *šannatta* (MH+) (< \**sénh<sub>2</sub>-o*)

*arra*- ‘wash oneself’: pret. *arratat* (jh) (< \**h<sub>1</sub>érH-o*; cf. Jasanoff 2003: 78)

*parḥ*- ‘rush, drive, chase’: *parḥattari* (MH) (← \**parra-* < \**bhérh<sub>2</sub>-o*)

*ħuḡai-/ħuġa-* ‘run’: pres. *ħūġatta* (jh) (< \**h<sub>2</sub>uh<sub>1</sub>-o-*; Melchert 1984: 46)

*ep-* ‘seize’: *eppattat* (jh)

*pippa*- ‘turn over’: *pippattari* (OH++) (< \**pí-pH-o-*; cf. Jasanoff 2003: 131)

*ueḥ*- ‘turn’: pres. *ueḥatta* (OH++), *ueḥattat* (OH++)

*šūḡai-* ‘fill’: *šūḡattari* (MH+), *šūḡattat* (jh)

*taḥš-* ‘be allotted, be destined’: *taḥšattari* (jh)

うえのリストに含まれている 13 例のうち、最初の 6 つの動詞が語幹末にソナントと喉音 (laryngeal) という子音連続を持っているのは興味深い。この連続はヒッ

24) このリストでは、もっとも早い時期に記録されている形式が代表例として示されている。

タイト語において母音間で規則的に二重ソナントになる (\*VRHV > VRRV)<sup>25)</sup>。7つめの例の parh- (< \*bhérh<sub>2</sub>-) も同じ語根構造をしているが、3人称の parhattari には二重ソナントがみられない。その理由は、おそらく対応する能動態 mi- 動詞 3 人称単数 parahzi からの形態的な影響と考えられる。すなわち、音韻的にみると規則的である parrattari が二次的に parhattari に取って代わられたに違いない<sup>26)</sup>。つぎの hūjatta にみられる語尾 -tta の前の a は、実際に読まれていたに違いない。もし a が読まれていなかったならば hūitta という綴りが予想されるが、このような例は存在しない。つぎの 2 つの例 eppattat と pippattari についても、同様の解釈が導かれるであろう。それらはそれぞれ eptat (3 人称能動態の epzi を参照) と piptat というふうにも書こうと思えば書けたはずなのに、このような例がないためである。つぎの ũeḥatta (ũeḥattat) と šuḡattari (šūḡattat) については、それぞれ実在する ũeḥtari と šuttati から二次的につくられたと解釈できる<sup>27)</sup>。最後の taḥšattari にみられる語尾 -ttari の前の a については、さきの例でも述べたように taḥš- は語根末に子音連続を持っているために、それが表記上のものかそうでないかという判断は不可能である。以上の 13 の動詞語幹からつくられる例のうち (最後の taḥšattari も含めて)、古期ヒッタイト語のオリジナルの粘土板に記録されている例はやはり 1 例もない。この事実は、-atta を持つ中・受動態 3 人称単数形は遅い時期のヒッタイト語の特徴であることを物語っている。

ヒッタイト語内部の歴史において -a → -ta および -a → -atta という形態変化を受けた例がかなり多くあることをすでにみた。しかしながら、それらの中・受動態動詞は本来の a- クラスから ta- クラス、あるいは atta- クラスに完全に移行しているとは考えられない。なぜならば、以下の例から分かるように、それらのうちの非常に多くが本来の a- クラスとしての特徴を遅い時期のヒッタイト語の 3

25) 詳しくは、Melchert (1984: 44<sup>91)</sup>, 1994: 79), Oettinger (1979: 549) を参照。CVRH-o という構造を持つ中・受動態動詞がすべて -atta を持つわけではない。すでにみたように、-a を持つ ḥannari (< \*h<sub>3</sub>énh<sub>2</sub>-o-) という例もある。

26) parhattari の祖形として \*bhḡh<sub>2</sub>-o ではなく、\*bhérh<sub>2</sub>-o を建てる理由については、Yoshida (forthcoming b) で論じられている。

27) これらの例は、-ta → -atta という形態変化を示している。この点については Craig Melchert からの指摘を受けた。

人称単数命令形においても保持しているからである<sup>28)</sup>。

- eša, ešari → eštat; 3 人称単数命令形 ešaru (jh)  
 tuḥša, tuḥš[a]ri → tuḥḥušta; 3 人称単数命令形 tuḥšaru (jh)  
 laḥuḡari → laḥuttari; 3 人称単数命令形 laḥuḡaru (jh)  
 ʁaššari → ʁaštari; 3 人称単数命令形 ʁaššaru (jh)  
 paḥšari → paḥḥaštāt; 3 人称単数命令形 paḥšaru (jh)  
 ḥannari, ḥannat → ḥannatāt; 3 人称単数命令形 ḥannar[u] (jh)  
 nēari, nēat, nēja, nejat → neattāt, nejattāt; 3 人称単数命令形 nejaru (jh)  
 a[rg]a → arkattā; 3 人称単数命令形 argaru (jh)  
 lagāri → lagāittari; 3 人称単数命令形 lagāru (jh)  
 karša → karaštari; 3 人称単数命令形 karaššaru (jh), karaštaru (mh)  
 paršija → paršittari; 3 人称単数命令形 paršittaru (jh), paršijaddaru (jh)

最後の2つの例のうち、karš- は karaššaru と karaštaru にみられるように、a- クラスと ta- クラスの命令形を持っている。また paršija- ではもっぱら -ttaru もしくは -ddaru による命令形しかみられない。うえにあげた例から分かることは、直説法では a- クラスから ta- クラスあるいは atta- クラスへの移行があったとしても、命令法では最後の2例を除いて本来の a- クラスの地位を保持しているということである。さらに興味深いことに、ḥap- ‘join’ (直説法 ḥapdari, ḥaptat) と auš- ‘see’ (直説法 ʁaittari, ʁaittat, auštāt) という2つの ta- クラスの中・受動態動詞においても、それらの3人称単数命令形はそれぞれ ḥapparu (ah), uḡaru (mh) というように -ta ではなく、-a を持っている。

本節で行ったヒッタイト語内部の事実の分析から得られた結果はつぎの通りである。

- i) -a → -ta と -a → -atta という2つの形態変化はヒッタイト語の歴史時代になお進行中であった。
- ii) -atta を持つ中・受動態動詞はヒッタイト語の遅い時期の特徴であり、古期

28) 言うまでもないが、以下のリストからは3人称単数命令形が記録されていない中・受動態動詞は除かれている。

ヒッタイト語のオリジナルの粘土板には記録されていない。

iii) -ta と -atta を持つ中・受動態動詞の多くは、命令形 -aru に本来の a- クラスの特徴を保持している。さらに、ta- クラスの中・受動態動詞でさえ3人称単数命令形に -aru という語尾を取っていることがある。

### 3. データの歴史的な解釈

本節では、前節で明らかになったヒッタイト語内部の新しい事実に対して、歴史比較言語学的な立場からの分析を試みる。本稿の第1節のはじめに、印欧祖語に一般に再建されている中・受動態語尾のパラダイムを示した。そこでは、3人称単数の位置に \*-o と \*-to という2つの語尾が建てられていた。さてここで、再建される印欧祖語がいつの時期に遡るかと一般にみなされているのかについてみてみたい。Watkins (1994: 46) は印欧祖語を今から7千年前、すなわち紀元前5千年頃に話されていた共通基語と考えている。また Jasanoff (2003: 17) もほぼ同様の見方を示している。第2節で明らかになった事実のひとつに、-a → -ta という形態変化はヒッタイト語の歴史時代になお働いていたということがあった。もし中・受動態3人称単数語尾として \*-o 以外に \*-to も印欧祖語に再建するなら、-a → -ta (印欧祖語 \*-o → \*-to) という形態変化の速度は例外的に遅いということになる。つまり、印欧祖語の段階 (\*-o → \*-to) からヒッタイト語の歴史時代 (-a → -ta) にいたるまで、約3,500年にわたって作用していたことになる。このような長期にわたる言語変化はまったく非現実的である。したがって、\*-to という語尾が印欧祖語に存在していたとは考えられない<sup>29)</sup>。

前節で明らかになった他の2つの事実もこの見方を強く支持している。すなわち、古期ヒッタイト語のオリジナルの粘土板に -atta がみられないことによって、-ta がつくられたのはそれほど早い時期ではないことが分かる。なぜならば、-atta という語尾は本来の -a に二次的な -ta が付与されたものであるが、それが

29) かりに印欧祖語の時期を紀元前3千年頃に想定したとしても、本稿での主張は影響を受けない。Watkins (1969: 86) 自身も、さきに触れた、ヒッタイト語 eštari をヴェーダ āste 'sits' やギリシア語 ἴσται 'id.' と誤って同定した文脈のなかで、これらの形式が各分派諸言語内部の歴史における独立した発展ととらえることが可能であると述べている。

つくられるには -ta の存在が前提となるからである。また、直説法では ta- クラスに移行した中・受動態動詞においても、その3人称単数命令形が多くの場合、なお a- クラスの特徴を保持していることは、この見方をさらに裏づけるものである。

印欧祖語に \*-to が（そして必然的に \*-otto も）存在しなかったと考えるならば、それでは \*-to がつくられたのはヒッタイト語の先史のどの時期であるのかを、はたして特定化することが可能であろうか。この問題の解明に向けて非常に重要な鍵をにぎる事実がヒッタイト語内部にみられる。それは、まず以下の例が示しているように、-ta という二次的につくられた語尾は現在形ではなく、過去形に顕著にみられることである。

現在形 paḥšari vs. 過去形 **paḥḥaštat** (cf. 命令形 paḥšaru)<sup>30)</sup>

現在形 eša(ri) vs. 過去形 ešati, ešadi, ešat ~ **eštat, eštat** (cf. 命令形 ešaru)

現在形 tuḥšari ~ **tuḥḥušta** vs. 過去形 **tuḥḥuštati, tuḥḥuštāt** (cf. 命令形 tuḥšaru)

現在形 laḥuḡari ~ **laḥuttari** (または **laḥuḡatari?**) vs. 過去形 **laḥuttat** (cf. 命令形 laḥuḡaru)

最初の例では、現在形の paḥšari が本来の -a を保持しているのに対して、過去形の paḥḥaštat は ta- クラスに変わっている。2つめの例では、現在形の eša, ešari は一貫して a- クラスであるが、過去形では a- クラスの ešati, ešadi, ešat 以外に ta- クラスの eštat と eštat が使われている。3つめの例では、過去形は ta- クラスの tuḥḥuštati と tuḥḥuštāt しか持っていないのに対して、現在形では -a を持つ tuḥšari と -ta を持つ tuḥḥušta の両方がみられる。特に注目すべき点は tuḥḥuštati が古期ヒッタイト語の特徴である小辞 -ti を持っていることである。したがって、-a → -ta という形態変化は現在形よりもさきに過去形に起こったことが明らかである。4つめの例では、現在形では本来の a- クラスの laḥuḡari に加えて、-ta を持つ laḥuttari (または laḥuḡatari?) という二次的な形式があるが、過去形では ta- クラスの laḥuttat しかみられない。うへの4つの例については、対応する3人称単数命令形も記録されているが (paḥšaru, ešaru, tuḥšaru,

30) 以下のリストにおいて、-ta および -atta を持つ形式は太字でマークしている。

lahūqaru), それらがすべて a-クラスの語尾を示していることも見逃すことのできない事実である。

-ta の場合と同様に, -atta という語尾も過去形に顕著にみられる。

現在形 *ḥannari* vs. 過去形 *ḥannat* ~ ***ḥannatat*** (cf. 命令形 *ḥannar[u]*)

現在形 *nejari*), *nēari* vs. 過去形 *nejat* ~ ***nejattat***, ***neattat*** (cf. 命令形 *nejaru*, *nejāru*)

現在形 *ḥuittijari* vs. 過去形 *ḥuittijati* ~ ***ḥuittijattat*** (cf. 命令形 *ḥuittijaru*)

現在形 *ḥālija(ri)* vs. 過去形 ***ḥaliġattat***

現在形 *iškallāri* vs. 過去形 ***iškallatta***

現在形のすべての例は, *ḥannari*, *nejari*), *nēari*, *ḥuittijari*, *ḥālija(ri)*, *iškallāri* によって例証されるように, 本来の -a を保持している。これに対して, 過去形では -a を持つ *ḥannat*, *nejat*, *ḥuittijati* もあるが, 多くは *ḥannatat*, *nejattat*, *neattat*, *ḥuittijattat*, *ḥaliġattat*, *iškallatta* にみられるように, -atta を持つようになっている。さらに, 命令形 3 人称単数が記録されている場合も, *ḥannar[u]*, *nejaru*, *nejāru*, *ḥuittijaru* にみられるように, やはり古い a-クラスの特徴が維持されている。

つぎに示す 3 つの例は, 一見したところではうえに示したパターンから逸脱しているように受け取られるかもしれない。

現在形 ***šuppijaḥtari*** (mh) vs. 過去形 *šuppijaḥhati* (2×, OH), *šuppijaḥḥati* (OH++)

現在形 ***šuniijaḥta*** (OH++) vs. 過去形 *šuniijaḥḥati* (OH+<sup>2</sup>)

現在形 *šijāri* (OH++), ***šijettari*** (jh) vs. 過去形 *šijati* (2×, OH++ and mh)

これら 3 例では, うえでみたパターンとは反対に, 現在形が *šuppijaḥtari*, *šuniijaḥta*, *šijettari* にみられるように -ta を持つのに対して (*šijāri* は a-クラス), 過去形 *šuppijaḥhati*, *šuppijaḥḥati*, *šuniijaḥḥati*, *šijati* はすべて本来の -a を持っている。しかしながら, これら 4 つの過去形には古期ヒッタイト語の特徴である小辞 -ti が付与されていることを見逃してはいけない。したがって, これらの形式は後の



時期にコピーされた場合も書き改められずに、すべて古期ヒッタイト語の文法特徴を保っていると考えられる。他方、現在形である *šuppijaḫtari*, *šuniijaḫta*, *šije-ttari* は、*-a* → *-ta* という形態変化を受けた、後の時期を代表する形式に違いない。少なくとも *šuppijaḫtari* と *šijēttari* に関する限り、それらが二次的な形式であるという十分な理由がある。Yoshida (1990: chapter 3) で示されているように、*-ri* が付与された *-ta* という語尾は、新しい時期のヒッタイト語の特徴であるからである。

これまでの議論では、分析の対象が現在形と過去形の両方が記録されている中・受動態動詞のうち、*a*-クラスから *ta*-クラスへの移行がみられるものに限られていた<sup>31)</sup>。ここで現在形あるいは過去形のいずれかしか記録されていない中・受動態動詞に目を向けてみよう。補遺に含まれているデータをみると、*a*-クラス中・受動態動詞のうち現在形しか記録されていない例は13例 (*a*-‘be warm’, *arš*-‘flow’, *ḫatta*-‘strike’, *lag*-‘bow’, *nekumantai*-‘make naked’, <sup>NA4</sup>*piruluḫa*-‘liberate from the stone’, *šaḫ*-‘pollute’, *šalik*-‘approach’, *tethai*-‘thunder’, *tija*-‘step’, *turišḫ*-‘?’, *ḫar*-‘burn’, *zeja*-‘cook’), 過去形しか記録されていない例は4例 (*aḷanzaḫḫ*-‘bewitch’, *ašš*-‘be good’, *kulija(ḫa)ḫḫ*-‘make flow’, *pugg(a)*-‘be hated’) である。これに対して、*-ta* で特徴づけられる *ta*-クラスのうち現在形しか記録されていない例は7例 (*arpu*-‘be difficult’, *ištamaš*-‘hear’, *manijaḫḫ*-‘deliver’, *ḫarnu*-‘burn’, *ḫaš(š)/ḫeš(š)*-‘be dressed’, *ḫatku*-‘jump’, *zaḫ(ḫ)*-‘beat’), 過去形しか記録されていない例は17例 (*aš*-‘remain’, *auš*-‘see’, *ḫamenk*-‘tie’, *ḫeš-/ḫaš*-‘open’, *ḫulla*-‘combat’, *ḫR-aḫḫ-/ḫR-naḫḫ*-‘subjagate’, *išḫuḫa*-‘sprinkle’, *ištarnink*-‘make sick’, *karp*-‘raise’, *lam*-‘mix’, *mauš*-‘fall’, *nakkeš*-‘become heavy’, *nakkijaḫḫ*-‘make heavy’, *neku*-‘get dark’, *parkunu*-

31) 補遺に示されたデータによれば、現在形と過去形の両方が記録されている中・受動態動詞のうち、一貫して *a*-クラスであるものは5例 (*išduḫa*-‘become evident’, *kiš*-‘become’, *kišt*-‘be extinguished’, *mija*-‘grow’, *dug(g)*-‘be visible’), 一貫して *ta*-クラスであるものは24例 (*ar*-‘stand’, *aššanu-/ašnu*-‘arrange’, *ḫandai*-‘arrange’, *ḫap*-‘join’, *ḫarp*-‘get separated’, *ḫulla*-‘combat’, *ḫunik*-‘smash’, *iḫa*-‘march’, *išijaḫḫ*-‘announce’, *ki*-‘lie’, *kikkiš*-‘become’, *la*-‘release’, *luk(k)*-‘dawn’, *ninink*-‘raise’, *munnai*-‘hide’, *šuḫai*-‘fill’, *da*-‘take’, *damaš*-‘press’, *tameummaḫḫ*-‘change’, *tarna*-‘let’, *tarup(p)*-‘unite’, *duddu*-‘be led (?)’, *duḫarnai*-‘break’, *ḫeḫ*-‘turn’), *atta*-クラスでは4例 (*barra*-‘crush’, *šarra*-‘break’, *tarra*-‘be able, can’, *zinna*-‘end’) みられる。

‘purify’, up- ‘go up’, ualk- ‘?’) である。また, ta- クラスのなかで -atta で特徴付けられる中・受動態動詞のうち, 現在形しか記録されていない例は5例 (huu'ai-/huja- ‘run’, parh- ‘chase’, pippa- ‘turn over’, šanna- ‘conceal’, taḥš- ‘be allotted’), 過去形しか記録されていない例は2例 (arra- ‘wash oneself’, ep- ‘seize’) である。これを表にしてまとめると, 以下のとおりである<sup>32)</sup>。

	現在形と過去形の両方		現在形のみ		過去形のみ	
a- クラス		5		13		4
ta- クラス	-ta	24	-ta	7	-ta	17
	-atta	4	-atta	5	-atta	2

うえの結果は驚くべきものである。現在形と過去形の両方を記録に持つ例から明らかのように, ta- クラス中・受動態動詞のほうが a- クラス中・受動態動詞よりも数のうえでははるかに多い。それにもかかわらず, 現在形のみを記録に持つ例と過去形のみを記録に持つ例の割合は, a- クラスと ta- クラスとのあいだで偶然とは考えられない大きな差異がある。すなわち, 現在形しか記録されていない中・受動態動詞のうち, a- クラスは13例であるのに対して, ta- クラスは12例 (-ta を持つもの7例, -atta を持つもの5例) というように, a- クラスのほうが1例多い。ところが, 過去形しか記録されていない中・受動態動詞については, a- クラスがわずか4例であるのに対して, ta- クラスは19例 (-ta を持つもの17例, -atta を持つもの2例) というように, 圧倒的な数字の開きがあるのである。この事實は, うえで明らかになった2つのパターン, すなわち「-a を持つ現在形 vs. -ta を持つ過去形」, そして「-a を持つ現在形 vs. -attat を持つ過去形」という2つのパターンに加えて, -ta が過去形において顕著に好まれるということを如実に示している<sup>33)</sup>。

32) 表には, 現在形と過去形の両方が記録されている例も合わせて示した。

33) Jasanoff (2003: 51) は, \*-o から二次的につくられた \*-to が \*-ske/o- および \*-je/o- という接尾辞を持つ中・受動態動詞に由来し, そこから他のクラスの語幹に拡がったと提案している。印欧祖語の段階で \*-o(r) が \*-ske/o- や \*-je/o- を持つ動詞には用いられなかったと考える点では, 彼はおそらく正しいであろう。しかしながら, 本稿で明らかになった事實, すなわちヒッタイト語の -ta は現在形ではなく, 過去形に顕著にみられるという事實は彼の見方では説明できない。

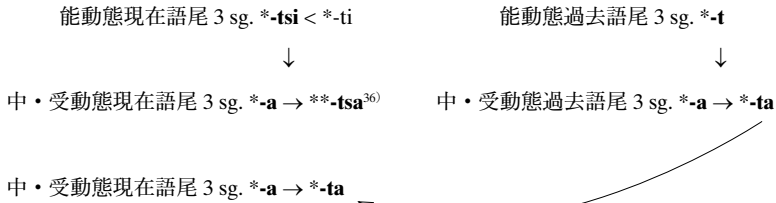
この *-ta* の分布にみられる不均衡が意味するところを理解するのはそれほど難しいことではない。 *-ta* (< \**-to*) は対応する能動態 3 人称単数語尾 *-t* (< \**-ti*) の影響を受けて *-a* (< \**-o*) から二次的につくられた。もしこの形態変化において一次語尾 (現在語尾) \**-ti* からの影響と二次語尾 (過去語尾) \**-t* からの影響に差がなかったとするなら、\**-o* が \**-to* に取って代わられる割合は現在形と過去形とのあいだで違いがないはずである。これは、以下に示すように、アナトリア語派以外の諸言語に実際に生じた変化である。

能動態一次語尾 3 sg. * <i>-ti</i> ↓ 中・受動態一次語尾 3 sg. * <i>-or</i> → * <i>-tor</i> e.g. ギリシア語 <i>κεῖται</i> ‘lies’ (< * <i>-to-i</i> )	能動態二次語尾 3 sg. * <i>-t</i> ↓ 中・受動態二次語尾 3 sg. * <i>-o</i> → * <i>-to</i> e.g. ギリシア語 <i>ἔκειτο</i> ‘lay’ (< * <i>-to</i> )
--	--

これに対して、ヒッタイト語の中・受動態動詞においては現在語尾からの影響よりも過去語尾からの影響がはるかに大きかった。その理由は、3 人称単数現在語尾 \**-ti* がヒッタイト語の先史において破擦化して \**-tsi* になったことに求めることができる<sup>34)</sup>。この \**-tsi* は対応する 3 人称単数中・受動態現在語尾に形態的影響を及ぼさなかった。しかしながら、破擦化を被らなかつた過去語尾 \**-t* は<sup>35)</sup>、他の語派と同じように、対応する中・受動態過去語尾に影響を与えた。このようにして過去形にまず新しくつくられた 3 人称単数中・受動態語尾 \**-ta* は、後に対応する現在形語尾にも徐々に広がるようになった。このプロセスは、前節で述べたように、ヒッタイト語歴史時代になお観察される。これらの形態変化を図式的に示すと、以下のようになる。

34) ヒッタイト語の先史に生じた破擦化は \**-ti* だけでなく、\**-di* にも生じた。3 人称単数現在語尾 \**-di* はアナトリア祖語の時期に特定の条件のもとで起こった子音の弱化によってもたらされた。破擦化がこの \**-di* に生じた結果、\**-tsi* 以外に \**-dzi* もつくられ、この \**-dzi* は古期ヒッタイト語のオリジナルの粘土板に記録されている *uemizi* ‘finds’, *iezi* ‘does’, *pihutezi* ‘brings’, *zinnaz[i]* ‘finishes’ にみられるシングルの *-z-* に反映されている (詳しくは Yoshida 1998a, 1998b を参照)。しかしながら、本稿での議論を不必要に複雑にしないために、\**-dzi* についてはここでは考えない。

35) 3 人称単数能動態過去語尾 \**-t* は、母音語幹に付くとき、アナトリア祖語の段階で弱化して \**-d* になった。ヒッタイト語の 3 人称単数中・受動態現在語尾では一般に *-tta* /*-ta*/ であるために、この \**-d* は問題の形態変化に関与しなかつたか、あるいは一度はつくられた */-da/* が後に */-ta/* によって駆逐されたと考えられる。



この再建によって、ヒッタイト語において中・受動態3人称単数語尾の *-ta* がなぜ過去形に顕著であるかという理由が説明できると思われる。必ずしもすべての *ta*-クラスの中・受動態動詞が破擦化の後につくられたと主張するわけではない。しかしながら多くの *ta*-クラスの例、少なくとも「*-a*を持つ現在形 vs. *-ta*を持つ過去形」というパターンを示す例は破擦化の後に誕生したと考えなければならない。そして、*-a* → *-ta* という形態変化が起こった後に、もうひとつの形態変化である *-a* → *-atta* が生じた。この変化についても、*-a* → *-ta* と同様にまず過去形に (*-a(ti)* → *-a-tta(ti)*)、つぎに現在形に (*-a(ri)* → *-a-tta(ri)*) もたらされたと考えなければならない。*-a* → *-atta* が作用したのが *-a* → *-ta* より遅かったことは、*-atta* を持つ中・受動態動詞が古期ヒッタイト語のオリジナルの粘土板に記録されていないことから裏づけられる。

Yoshida (1990: 118) では、アナトリア祖語後期における3人称単数中・受動態現在形の語尾として3つの別個の形式が再建されている。それらはアクセントを持つ *\*-ári*、アクセントを持たない *\*-a*、アクセントを持たない *\*-ta* である<sup>37)</sup>。これら3つの再建形は、より古い語尾 *\*-ár*, *\*-ar*, *\*-tar* (すなわち *\*-ór*, *\*-or*, *\*-tor*) から、アクセントのない母音の後での語末の *-r* の消失、および存続した *\*-ár* への能動態現在にみられる小辞 *-i* の付与によって導くことができる。しかしながら、これまでの本稿での議論によって印欧祖語に *\*-to* という中・受動態語尾が存在していなかったことが明らかになっている。また同様にアナトリア祖語においても *\*-to* はまだつくられていなかったと考えられる。したがって、

36) *\*\*tsa* にみられる *\*\** は、それに続く形式が予想されるが、実在しないことを意味する。  
 37) これら3つの再建された語尾は、Melchert (1992) によって確立されたアナトリア祖語5母音説に従い、*\*-óri*, *\*-o*, *\*-to* と修正されなければならない。幸いなことに、このように修正したとしても、本稿の中心的な主張は何ら影響を受けない。

\*-ári, \*-a, \*-ta という3つの語尾はアナトリア祖語に遡るものではなく、より遅い時期、おそらく前ヒッタイト語の時期の状態を反映していると考えられる。このように考えると、アナトリア祖語にはアクセントを持つ \*-óri とアクセントを持たない \*-o の2つが3人称単数中・受動態現在形語尾としてあった可能性が強い。前者の \*-óri という語尾は、アクセントと -ri という要素によって3人称単数中・受動態現在形であることが明示的に示されているために、能動態の t が付与される動機がなかった。一方、後者の \*-o という語尾はその機能的な位置が十分にマークされていないために、3人称単数であることをより明確に特徴づけられる必要があった。この状況を救うために、中・受動態の \*-o に対応する能動態の t が付与され、\*-to がつくられるようになった。しかしながら、この形態変化はうえてみたようにヒッタイト語の歴史時代になお進行中であるために、それほど早い時期に起こったとは考えられない。

ヒッタイト語の先史で \*-ta (< \*-to) がつくられたとき、中・受動態動詞のパラダイム内部に語幹の異形態がみられる場合があったに違いない。そのひとつの例と考えられるのが、\*kei-‘lie’ (ヒッタイト語 ki-) である。ヒッタイト語 kitta(ri) ‘lies’ に対応する楔形文字ルウィ語 zijar(i) とリュキア語 sijēni (sijeni) には t が付加されていないために、kittari がヒッタイト語内部の歴史で -ta を持つようになったことは明らかである。この ki- の現在単数形には以下のような歴史的变化が想定される。

- 1 sg.    \*k̂éi-h<sub>2</sub>e > \*k̂é̃-ha > \*k̂í-ha > \*\*kiḫḫa  
 2 sg.    \*k̂éi-th<sub>2</sub>e > \*k̂é̃-ta > \*k̂í-ta > \*\*kitta  
 3 sg.    \*k̂éi-o(r) > \*k̂é̃-a → \*k̂é̃-ta → kitta(ri)

Melchert (1994: 90f., 188f.) の音韻分析に従うならば、1人称と2人称単数形にそれぞれ \*\*kiḫḫa と \*\*kitta が予想される<sup>38)</sup>。他方、3人称単数形 \*k̂éi-o に関しては、t の付加の後 \*k̂é̃-ta になったと考えられる<sup>39)</sup>。この形式が実際には存在しないことは、1人称と2人称単数に予想される語幹 \*k̂í- (> ki-) がパラダイムに

38) 実際には、ki- の1人称と2人称現在形は記録に残っていない。

39) もしも母音間の i の消失が早ければ、\*k̂é-ta が予想される。

広がったものとして容易に説明できる。

ヒッタイト語以外のアナトリア諸語において記録されている中・受動態動詞はそれほど多くない。楔形文字ルウィ語には、つぎの3人称単数現在形が記録されている<sup>40)</sup>。ājari ‘becomes’, lalašhari ‘?’, zija(i) ‘lies’, anāittari ‘?’, ḫaltittari ‘calls’, ḫāššidari ‘?’, kulanittar ‘brings to end’, mamḫuttari ‘?’, palpatittari ‘blazes (?)’, puppušša<at>tari ‘crushes’, tarpātar ‘walks on (?)’, ūittari ‘sees’. また、リュキア語の中・受動態3人称単数現在形には sijēni, sijeni, sitēni ‘lies’ があり<sup>41)</sup>、パラ語には ḫāri ‘is warm’, kītar ‘lies’ がある<sup>42)</sup>。これらの例にみられる ta- クラス中・受動態動詞(楔形文字ルウィ語 anāittari, ḫaltittari, ḫāššidari, kulanittar, mamḫuttari, palpatittari, puppušša<at>tari, tarpātar, ūittari, リュキア語 sitēni, パラ語 kītar) は、ヒッタイト語にみられたのと並行的な、しかし独立した発展によってつくられたと考えられる<sup>43)</sup>。アナトリア祖語の時期には能動態3人称単数語尾として \*-ti と \*-di が存在していた。このうち \*-di のほうは、子音の弱化規則によってつくられた二次的な語尾である<sup>44)</sup>。これらの \*-ti と \*-di に含まれる歯茎音が中・受動態語尾 \*-o に形態的影響を及ぼしたのであるが、すでに詳しくみたヒッタイト語では d ではなく、t のほうが好まれた結果、-tta /-ta/ が一般化されている。同様に、楔形文字ルウィ語とリュキア語でも \*t のほうが一般に好まれたと考えられる。他方、データは少ないが、パラ語では弱化した \*d が観察される<sup>45)</sup>。

40) 以下は Melchert (1993) にみられる例である。kulanittar, tarpātar という -ri ではなく -r を持つ例は、i-apocope によって二次的につくられたと考えられる。

41) Melchert (2004) に含まれている例である。

42) Carruba (1970) に含まれている例である。-r を持つ kītar はやはり二次的な形式と考えられる。また šarkutat ‘?’ も3人称単数中・受動態動詞過去形の可能性がある。パラ語 ḫāri は、やはり \*-āri という語尾が t (あるいは d) の付加を拒んでいることを示している。この形式は、ヒッタイト語以外にも同じ現象がみられるという点で重要である。

43) ヒッタイト語の場合と異なり、楔形文字ルウィ語、リュキア語、パラ語には -atta を持つ中・受動態動詞がみられない。この事実は、ヒッタイト語の遅い時期に -atta を持つ中・受動態動詞がつくられたという、さきに示した見方を裏づけるさらなる根拠と言えるだろう。

44) アナトリア祖語に生じた子音の弱化規則については、Eichner (1973: 79-82, 100<sup>86)</sup>) と Mörpurg Davies (1982/83: 262) に詳しい。弱化はアクセントのある長母音あるいは二重母音の後、もしくはアクセントのない母音間にみられる。

45) さきにあげた kītar と šarkutat にみられるシングルの -e を参照。

これに対して、ルウィ系諸言語、すなわち楔形文字ルウィ語、象形文字ルウィ語とリュキア語の中・受動態動詞3人称単数過去語尾については、ヒッタイト語そしておそらくパラ語と根本的に違った説明が必要となる。ルウィ系諸言語には、共時的にみて確実に中・受動態過去形といえる例は一例もない (Yoshida 1993: 26-27)。これに対して、能動態の3人称単数現在語尾および過去語尾は以下のとおりである。

	楔形文字ルウィ語		象形文字ルウィ語		リュキア語	
3人称単数現在	I. -ti	II. -tti	I. -ti/-ri	II. -ti	I. -di	II. -ti
3人称単数過去	I. -ta	II. -tta	I. -ta/-ra	II. -ta	I. -de	II. -te

楔形文字ルウィ語では、現在形でも過去形でも母音間でシングルの *-t-* を持つ動詞とダブルの *-tt-* を持つ動詞という2つのグループがある。各動詞は一貫してシングルの *-t-* を示すか (うへの表のグループ I)、あるいはダブルの *-tt-* を示している (うへの表のグループ II)。楔形文字ルウィ語で一貫してシングルの *-t-* を持つ動詞は、象形文字ルウィ語においてロタシズムを受けた *r* と交替する *t* を持つ動詞と対応する<sup>46)</sup>。さらにアルファベットで書かれているリュキア語においては有聲の *d* を持つ動詞と対応する。これに対して、楔形文字ルウィ語で一貫してダブルの *-tt-* を持つ動詞は、象形文字ルウィ語では決して *r* と交替しない *t* を持つ動詞と対応し、リュキア語では無聲の *t* と対応する。これは、Morpurgo Davies (1982/83: 259) によってはじめて発見された事実である<sup>47)</sup>。つぎに問題となるのは、この事実を説明すること、すなわちなぜルウィ系諸言語の能動態動詞がこれらの二通りの規則的な対応を示すようになったのかを説明することである。

この事実はつぎのように考えれば、もっとも自然に理解することができる。共

46) 象形文字ルウィ語では、文字のうえで有声閉鎖音と無声閉鎖音を区別しない。

47) 言うまでもないが、グループ I の動詞に含まれる語尾の歯茎音はアナトリア祖語の時期に弱化作用を受けた *\*d* を、グループ II の動詞に含まれる語尾の歯茎音は弱化を受けなかった *\*t* に遡る。象形文字ルウィ語において、*t* が *r* と交替する現象は二通りに理解できる。ひとつはロタシズムがなお進行中であり、完全には *r* に推移していなかった可能性であり、もうひとつは書記がロタシズムが起こる前の保守的な綴字法の影響をしばしば受けていた可能性である。

通ルウィ語の段階で、語末の歯茎音は消失した<sup>48)</sup>。この変化は能動態動詞の3人称単数過去語尾(\*-t, \*-d)にも作用した。この音変化の結果、語尾を持たない機能的に不透明な形式がつくられることになった。そしてこの形式の機能的位置付けを明瞭にするために、対応する3人称単数過去の中・受動態語尾(\*-to, \*-do)が付与されるようになった。それぞれの動詞に対して中・受動態語尾\*-toと\*-doのどちらが選ばれるかについては、つぎの類推のプロポーションが作用したと考えられる。

$$\begin{aligned} &*nti \text{ (3人称複数現在)} : *ti \text{ (3人称単数現在)} : *di \text{ (3人称単数現在)} = \\ &*nto \text{ (3人称複数過去)} : X_1 \text{ (3人称単数過去)} : X_2 \text{ (3人称単数現在)}^{49)} \\ &X_1 = *-to, X_2 = *-do \end{aligned}$$

すなわち、過去語尾に含まれる歯茎音が弱化しているか、弱化していないかは対応する現在語尾に含まれる歯茎音によって決定されるのである。このようにしてつくられた語尾\*-toと\*-doは3人称単数過去形を明示的に表す形式としてルウィ系諸言語で一般化されるようになったと考えられる<sup>50)</sup>。

#### 4. 結論

3人称単数中・受動態動詞に生じた-a → -taと-a → -attaという2つの形態変化は、ヒッタイト語の歴史時代になお働いていた。この事実に加えて、-attaを持つ形式が古期ヒッタイト語にみられないこと、および多くの命令形にa-クラスの特徴が保存されていることから、-taという中・受動態語尾がつくられたのは、ヒッタイト語の先史のそれほど古い段階でないことが分かる。さらに、-ta

48) ヒッタイト語 *melit* 'mead' に対する楔形文字ルウィ語 *malli*。関係代名詞の単数中性主格・対格ヒッタイト語 *kuit* に対する楔形文字ルウィ語 *kui*、リュキア語 *ti* などを参照。

49) 類推のプロポーションに含まれている3人称複数過去語尾\*-ntoは、楔形文字ルウィ語\*-nta、象形文字ルウィ語<sup>2</sup>-ta、リュキア語<sup>2</sup>-te/<sup>2</sup>tēから再建される。この\*-ntoがより古い\*-niに取って代わった理由については、Yoshida (1991: 368-70) に詳しく論じられている。

50) Yoshida (1993: 33-4, 2002: 173-4) では、新しい中・受動態3人称単数語尾\*-toと\*-doが共通ルウィ語の時期にすでにつくられていたと想定されている。しかしながら、このように考える必要はまったくない。なぜなら\*-toと\*-doは本文中に示した類推による形態変化によって容易につくりだされるからである。



が現在形よりも過去形に顕著にみられることから、現在語尾に生じた破擦音化の後に (\*-ti > \*-tsi), まず過去形において ta- クラスの中・受動態動詞の多くがつくられたとすることができる。

うえの分析に従うならば、前期アナトリア祖語および印欧祖語に再建される3人称単数中・受動態語尾は1次語尾 \*-or, 2次語尾 \*-o ということになる。一般に受け入れられている \*-tor, \*-to は印欧祖語に遡らず、アナトリア語派が祖語から離脱した後につくられたと考えられる。

印欧語史的音韻論の分野で、喉音を文献資料のうえで保存しているヒッタイト語および他のアナトリア諸語は研究の発展に向けてきわめて重要な役割を果たしてきた。しかしながら、これらの諸言語の重要性は音韻論の分野に限られているわけではない。印欧語史的形態論の分野においても、アナトリアの諸言語は祖語の再建に向けて決定的な役割を果たす重要な言語特徴をなおよく保持しているのである。

## 補遺

以下に示すのはヒッタイト語中・受動態動詞の a- クラスと ta- クラスへの分類である。後者には -ta を持つものと -atta を持つものが含まれている。配列は、現在形と過去形の両方が記録されている中・受動態動詞、現在形しか記録されていない中・受動態動詞、過去形しか記録されていない中・受動態動詞という順序である。3人称単数形が記録されていない中・受動態動詞、およびヒッタイト語内部の歴史において a- クラスから ta- クラスへの移行を示す中・受動態動詞はここには含まれていない。

### 1. a- クラス中・受動態動詞

現在形と過去形の両方が記録されている中・受動態動詞

išduqa- ‘become evident’

mija- ‘grow, increase’

kiš- ‘become’

dug(g)- ‘be visible, be of importance’

kišt- ‘be extinguished’

## 現在形しか記録されていない中・受動態動詞

a- 'be warm'	šalik- 'approach, do a wrong thing'
arš- 'flow' tethai- 'thunder'	tethai- 'thunder'
ħatta- 'strike'	tija- 'step'
lag- 'bow, bend'	turišh- '?'
nekumantai- 'make naked'	uar- 'burn'
<sup>NA4</sup> piruluqa- 'liberate from the stone'	zeja- 'cook'
šaħ- 'pollute, be foul'	

## 過去形しか記録されていない中・受動態動詞

alqanzahh- (UH-ħa) 'bewitch, enchant'	kulija(qa)ħh- 'make flow'
ašš- 'be good'	pugg(a)- 'be hated'

**2. ta-class**

## 現在形と過去形の両方が記録されている -ta を持つ中・受動態動詞

ar- 'stand'	luk(k)- 'dawn, get light'
aššanū-/ašnu- 'arrange'	ninink- 'raise, lift'
ħandai- 'arrange'	munnai- 'hide'
ħap- 'join'	šuqai- 'fill'
ħarp- 'get separated'	da- 'take'
ħulla- 'combat'	damaš- 'press'
ħunik- 'smash'	tameummaħh- 'change, become different'
ija- 'march'	tarna- 'let, leave'
išijaħh- 'announce'	tarup(p)- 'unite, assemble'
ki- 'lie'	duddu- 'be led (?)'
kikkiš- 'become'	duqarnai- 'break, tear to pieces'
la- 'release'	ueħ- 'turn'

現在形と過去形の両方が記録されている **-atta** を持つ中・受動態動詞

ħarra- ‘crush’	tarra- ‘be able, can’
šarra- ‘break’	*ueḥ- ‘turn’
*šuuai- ‘fill’	zinna- ‘end, finish’

(\* でマークされた動詞は **-atta** 以外に **-ta** も持っている.)

現在形しか記録されていない **-ta** を持つ中・受動態動詞

arpu- ‘be difficult’	uaš(š)-/ueš(š)- ‘clothe, be dressed’
ištamaš- ‘hear’	uatku- ‘jump, crack’
manijahḥ- ‘deliver, hand over’	zah(h)- ‘beat’
uarnu- ‘burn’	

現在形しか記録されていない **-atta** を持つ中・受動態動詞

ħuuai-/ħuija- ‘run’	šanna- ‘conceal’
parḥ- ‘rush, drive, chase’	taḥš- ‘be allotted, be destined’
pippa- ‘turn over’	

過去形しか記録されていない **-ta** を持つ中・受動態動詞

āš- ‘remain’	lam- ‘mix’
auš- ‘see’	mauš- ‘fall, drop’
ħamenk- ‘tie’	nakkeš- ‘become heavy’
ḥeš-/ħaš- ‘open’	nakkijahḥ- ‘make heavy’
ħulla- ‘combat’	neku- ‘get dark’
ÌR-ahḥ-/ÌR-naḥḥ- ‘subjugate’	parkunu- ‘clean, purify’
išhuua- ‘sprinkle, scatter’	up- ‘go up’
ištarnink- ‘make sick’	ualk- ‘?’
karp- ‘raise’	

過去形しか記録されていない *-atta* を持つ中・受動態動詞

arra- 'wash oneself'

ep- 'seize'

## 付論：印欧語族のなかでのアナトリア語派の位置と他の語派との歴史的関係

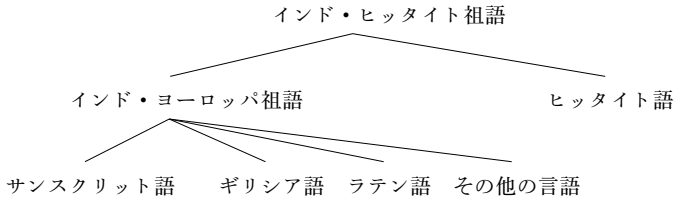
本論での中心的な主張は、印欧祖語の時期に *\*-to* という 3 人称単数中・受動態語尾がまだつられていなかったというものであった。この主張を裏づける理由は、アナトリア祖語の段階においてもなお *\*-to* がなかったという根拠がアナトリア諸言語の事実から得られることにある。アナトリア祖語に *\*-to* がなければ、より以前の印欧祖語にも当然 *\*-to* がいないことになるからである。他方、アナトリア語派以外の語派には *\*-to* による 3 人称単数中・受動態がみられる。この事実から、アナトリア語派が印欧祖語から分岐した後の時期で、なお残りの語派がまとまっていた時期に、*\*-o* から *\*-to* への形態変化が生じたと考えることができる<sup>51)</sup>。この見方は、印欧語族のなかでのアナトリア語派の言語的位置および他の語派との歴史的関係という問題につながってくるため、以下においてこの問題について筆者が現在考えていることを簡潔に述べたい。

分岐した言語間の系統関係を示すために、系統樹モデルという考え方がシュレイヒャーによって提案された (Schleicher 1861)。このモデルは言語の分岐の過程を一本の木にたとえることによって、どの言語とどの言語が歴史的にみて近いか遠いかを、一目瞭然に教えてくれる。その際、ひとつの枝にどの言語がふり分けられるかを決定する基準、つまり言語の下位分類の基準となるのは、特定の言

51) 査読者のおひとりから、*\*-o(r)* から *\*-to(r)* への形態変化がアナトリア諸語それぞれの内部で独立して起こり、また他の語派でも二次的に起こったとするなら、この変化を駆流としてとらえることができないだろうかという重要な指摘をいただいた。ただ、文法形式の機能的明確化は 3 人称単数中・受動態語尾に限られているのではなく、動詞パラダイムであれ、名詞パラダイムであれ、印欧諸語に広くみられる現象である。たとえば、ラテン語の 2 人称単数中・受動態語尾では *-re* (<*\*-so*) 以外に *-ris* (<*\*-re+s*) が、また同じくラテン語の現在完了 3 人称複数では *-ère* (<*\*-ēr+i*) 以外に *-ērunt* (<*\*-ēr+ont*) がみられる。*-ris* と *-ērunt* という語尾は、それぞれ能動態現在の *-s*、*-ont* という語尾が付加されることによって、人称が明示的に示されるようになっている。また幹母音 *\*-e/o-* をともなう名詞パラダイムの複数主格男性形においても、古い *\*-es* という語尾はサンスクリット語 *vṛkāś* 'wolves' やゴート語 *wulfos* (<*\*-o-es*) にはみられるが、ギリシア語 *λύκοι*、ラテン語 *lupī*、リトアニア語 *vilkai* では代名詞からの形態的影響を受けた *\*-oi* という語尾を持つようになっている。この場合も複数主格男性形を単数主格男性形 *\*-s* から明確に区別しようというのが、この形態変化の動機と考えられる。

語群にはみられるが他の言語群にはみられない革新的な言語特徴である。この革新的な言語特徴とは、ある言語群が祖語から分岐した後の歴史において被った変化の結果獲得したものとして理解される。

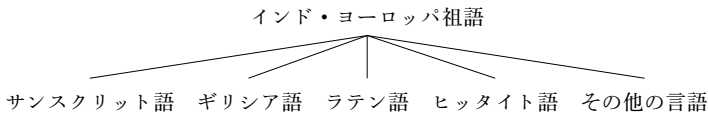
二十世紀はじめにヒッタイト語粘土板が発掘され、ヒッタイト語がインド・ヨーロッパ系の言語であることが解明されたとき、当時の学界はこの言語がそれまで知られていたどのインド・ヨーロッパ系言語からも違った独自の特徴を備えていることに驚いた。例えば、法には直説法と命令法の二つしかなく、時制は現在と過去に限られていて、また名詞の性についても男性と女性の区別がない点などは特異である。ヒッタイト語と残りのインド・ヨーロッパ諸語とのあいだにみられる、このような相違を自然に説明するものとしてイエール大学のスタートヴァントによって提唱されたのが、インド・ヒッタイト説 (Indo-Hittite hypothesis) である (Sturtevant 1933)。この見方では、ヒッタイト語は他のインド・ヨーロッパ諸語よりも早い時期にインド・ヒッタイト祖語という共通基語から分岐し、サンスクリット語、ギリシア語、ラテン語などの他のインド・ヨーロッパ諸語の直接の祖先であるインド・ヨーロッパ祖語と姉妹関係にあることになる<sup>52)</sup>。



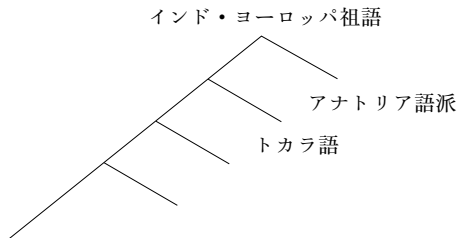
うえの図から明らかなように、ヒッタイト語にはみられないが、他のインド・ヨーロッパ諸語に共通する特徴は、インド・ヒッタイト祖語からインド・ヨーロッパ祖語に至る段階で獲得した特徴、あるいはインド・ヒッタイト祖語を離脱した後にヒッタイト語が獲得した特徴ということになる。しかしながら、インド・ヒッタイト説は、スタートヴァントのイエール大学での後進の研究者たちを

52) 当時は、ヒッタイト語以外のアナトリア諸語についての研究がほとんど手つかずの状況であったために、ヒッタイト語によってアナトリア語派を代表させている。

除いて、ほとんど賛同を得ることはなかった<sup>53)</sup>。その理由は、Benveniste (1966: 106) に代表されるように、祖語は新しい事実の発見によって常に修正される性格のものであるため、インド・ヨーロッパ語族の有機的なメンバーとして、ヒッタイト語をサンスクリット語やギリシア語などと対等の資格でインド・ヨーロッパ祖語の再建に組み込もうという見方が一般的であったためである（つぎの図を参照）。



こうしてインド・ヒッタイト説がほとんど省みられない時期は長く続いた。しかしながら、近年、むしろインド・ヒッタイト説に近い見方に立つ研究者が増えてきた<sup>54)</sup>。彼らがとっている見方は、祖語から離脱したのはヒッタイト語に代表されるアナトリア語派に限られるわけではなく、アナトリア語派に続いてトカラ語など複数の語派が祖語から段階的に分岐していったという見方である（つぎの図を参照）。



53) インド・ヒッタイト説はヨーロッパでは実質的に受け入れられなかった。唯一の例外と思えるのはドイツの Oettinger (1986) である。彼は、2005年10月1日に京都大学大学院文学研究科附属ユーラシア文化研究センター（羽田記念館）でおこなった講演のなかでも、インド・ヒッタイト説に基づく議論を展開していた。

54) 例えば、Melchert (1998: 25-26), Ringe (1998: 43), Garrett (1999: 147) を参照されたい。このうち、Melchert は2000年7月1日に京大会館で開催された第7回西アジア言語研究会における講演でも同様の見解を示していた。

このような新しい言語の分岐モデルが提案された根拠はつぎのように考えられる。アナトリア語派に他のインド・ヨーロッパ諸語と異なる特徴が顕著にみられることはすでに述べた。しかしながら、アナトリア語派にみられる特徴のうち、トカラ語には共有されるが、他のインド・ヨーロッパ諸語には欠けているものがある。この特徴は祖語に遡るものと考えられ、アナトリア語派とトカラ語では保存されたが、トカラ語の離脱の後に他の諸言語が失った特徴と見なすことによって最もよく理解できる。この立場を取るならば、早い時期に離脱した言語ほど祖語に遡る特徴を保持し、離脱が遅かった言語ほど新しい特徴を二次的に獲得していったことになる。

系統樹モデルは言語間の系統関係を示すうえで非常に有用である。しかしながら、このモデルでは十分に納得のいく説明が得られないケースもある。例えば、バルト語派のリトアニア語とラトヴィア語にみられる特徴が近隣のゲルマン語派のなかで古高地ドイツ語だけにみられるという事実がある。リトアニア語とラトヴィア語では長母音の \*ō が *uo* という二重母音になるが、ゲルマン語では同じ変化が古高地ドイツ語だけにみられ、他のゲルマン諸語では古い \*ō はそのまま保持されている（例えば、ゴート語 *fōtus*「足」、古英語 *fōt*、古アイスランド語 *fōtr*、古高地ドイツ語 *fuoz* を参照）。二つの独立した語派のなかの特定の言語のあいだにのみ独自の特徴がみられるという、このような現象を理解するために Schmidt (1872) が提案したのが波状モデルである。

もとより系統樹モデルは、あたかも祖語が斉一な言語であり、言語の分岐が突然に起こるという印象を与えかねない。しかしながら、どのような言語共同体でも完全に斉一な言語が使われているわけではなく、また言語の突然の分裂ということも稀である。シュミットは、言語特徴の類似はどのような語派のあいだでもみられ、そしてそのような類似は地理的に隣り合う地域に最も顕著であることを指摘した。そしてその理由として、ちょうど石を池に投げたときに、波紋が中心から周辺へ徐々に広がるのと同じように、言語変化は異なる言語の話手の接触によって、ひとつの言語から隣接する別の言語へと語派を越えて広がっていくからだと考えた。ゲルマン語派のうち古高地ドイツ語だけに \*ō から *uo* への変化が生じているといううえでみた事実も、波状モデルによれば、この変化がバルト

語派に地理的に最も近い古高地ドイツ語だけに広がり、残りのゲルマン諸語には変化の波が及ばなかったというふうに説明される。

言語の分岐を説明する系統樹モデルと言語特徴の拡散を説明する波状モデルは、決して相互に排他的であるわけではない。以下では、これらの二つのモデルを補完的に用いることによって、インド・ヨーロッパ諸語の言語的関係が自然に理解できることを示したい。

アナトリア諸語は印欧諸語のなかでもっとも古い文献資料を持ち、そのなかには他の諸言語が失った重要な言語特徴、たとえば喉音や本論で扱った \*-o による中・受動態が保持されている。したがって、インド・ヨーロッパ祖語からまずアナトリア語派が離脱したと考えられる。また中央アジアで発見されたトカラ語は、s-アオリストの動詞パラダイムにおいて非常に古い特徴が保存されている点などでアナトリア語派に近いと、つぎに離脱したと考えてよい。また、最も西に位置するケルト語派とイタリック語派は \*-ā- による接続法を持っている点などで、最も東に位置するトカラ語に近い。この特徴は残りの諸言語にはみられないために、トカラ語に続いてケルト語派とイタリック語派が離脱したと考えられる。さらに、これら四つ、アナトリア語派、トカラ語、ケルト語派、イタリック語派には、残りの言語が失った祖語に遡る言語特徴が他にもみられる<sup>55)</sup>。

祖語からアナトリア語派がまず離脱し、それに続いてトカラ語、さらにケルト語派、イタリック語派が離脱したが、中央に残った諸言語はなおひとつの言語共同体としてまとまっていたと想定することができる。その理由は、残りのインド・イラン語派、ギリシア語、バルト語派、スラブ語派、ゲルマン語派、アルメニア語、アルバニア語には、複数の二次的な言語特徴が部分的に重なり合うかたちで残されているからである。この状況は、これらの諸言語がまだひとまとまりであった時期に、複数の革新的な変化が複数の地点で起こり、これらの変化が及ぶ地域と及ばない地域があったと考えないかぎり、容易に理解できない。そしてこれらの変化が生じた後に、それぞれの語派の話し手は違った方向に移動していったと考えられる。

55) たとえば、-r の要素を持つ現在中・受動態語尾はアナトリア語派、トカラ語、ケルト語派そしてイタリック語派にはみられるが、残りの言語にはみられない。

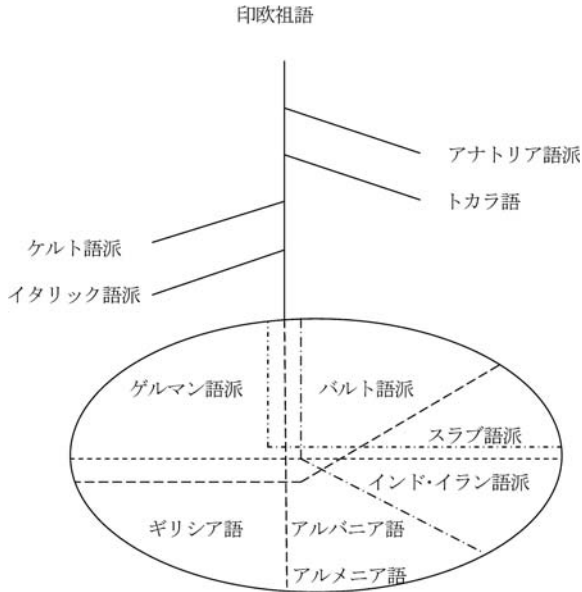


早い時期に離脱したアナトリア語派、トカラ語、ケルト語派、イタリック語派の言語にはみられず、残ったインド・イラン語派、ギリシア語、バルト語派、スラブ語派、ゲルマン語派、アルメニア語、アルバニア語のうちのいくつかにみられる二次的な言語特徴の代表的なものはつぎのとおりである。まず、インド・ヨーロッパ祖語に再建される \*k の歯擦音への変化は東側のインド・イラン語派、バルト語派、スラブ語派、アルメニア語、アルバニア語にはみられるが、西側のギリシア語とゲルマン語派にはみられない。さらに東側のグループのうち、インド・イラン語派、バルト語派、スラブ語派には、いわゆる「ルキ規則」とよばれる r, ʀ, ů, k, ĭ の後での s の変化が起こったが、この変化はアルメニア語とアルバニア語にはみられない。また、北方のスラブ語派、バルト語派、ゲルマン語派だけにみられる独自の特徴もある。インド・ヨーロッパ祖語の複数与格・奪格語尾と複数具格語尾には \*bh という子音が含まれていたが、北方諸言語では古教会スラブ語複数与格 -mъ、複数具格 -mi、リトアニア語複数与格 -ms、複数具格 -mis、ゴート語複数与格 -m (<\*-miz) のように、\*m に変化している。さらに、北方諸言語のうち、スラブ語派とバルト語派は独自のアクセント体系の点で、バルト語派とゲルマン語派は印欧祖語の母音 \*o と \*ā をそれぞれ a と ō にしている点で共通性がみられる。

ひとつの語族に属する諸言語が歴史的に近いか遠いかは、それらの言語相互のあいだにみられる共通の革新的特徴が多いか少ないかによって決定される。つまり、他の言語にはない特徴が特定の言語間にみられるならば、それらの言語は歴史的に近い関係にあることになる。しかしながら、中央に残った諸言語についてみれば、うえてみた特徴だけを取りあげても、必然的に等語線が交錯するかたちになってしまう。この事実は、うえて示した見方、つまり中央に残った諸言語がなおひとまとまりであった時期に複数の革新的変化が複数の地点で生じたという見方に立たない限り、十分に理解することができない。

以上の考察を総合すれば、印欧諸語がそれぞれに分かれていった過程は、76 頁の図のようなモデルによってもっともよくとらえることができる。

中央の諸言語のいくつかにみられる \*k の歯擦音への変化、ルキ規則、m を持つ複数与格・奪格、具格語尾、独自のアクセント体系、独自の母音変化といった



特徴は、アナトリア語派、トカラ語、ケルト語派そしてイタリック語派にはみられない<sup>56)</sup>。この事実は、これらの変化が起こった時点ではこれらの言語はすでに残りの諸言語から離脱していたことを示唆している。また、アナトリア語派、トカラ語、ケルト語派そしてイタリック語派には共通して保存されているが、残りの言語にはみられない独自の古い言語特徴の存在もうえに示したモデルの妥当性を裏づけている。

56) ただし、アナトリア語派の楔形文字ルウィ語とリュキア語では、\*k̥がそれぞれzとsに変化している（楔形文字ルウィ語 *ziyar(i)* 'lies', リュキア語 *sijēni* < \*k̥ej-o-r)。しかし、この変化はヒッタイト語とパラエ語にはみられないため（ヒッタイト語 *kitta(ri)*, パラエ語 *kītar*), アナトリア語派内部の二次的な変化と考えられる。

## 参 照 文 献

- Benveniste, Émile (1966) *Problèmes de linguistique générale* I. Paris: Gallimard.
- Carruba, Onofrio (1970) *Das Palaische*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Eichner, Heiner (1973) Die Etymologie von heth. *mēhur*. *Münchener Studien zur Sprachwissenschaft* 31: 53–107.
- Fortson, Benjamin W. (2004) *Indo-European language and culture*. Oxford: Blackwell.
- Friedrich, Johannes (1960) *Hethitisches Elementarbuch* I. Heidelberg: Carl Winter.
- Friedrich, Johannes (1991) *Kurzgefaßtes hethitisches Wörterbuch*. Heidelberg: Carl Winter.
- García Castillero, Carlos (2001) Zum indoiranischen Typ *śáye śére*. *Historische Sprachforschung* 115: 151–185.
- Garrett, Andrew (1999) A new model of Indo-European subgrouping and dispersal. *Proceedings of the 25th Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 146–156. Berkeley: Berkeley Linguistics Society.
- Gotō, Toshifumi (1997) Überlegungen zum urindogermanischen «Stativ». In: Emilio Crespo y José Luis García Ramón (eds.) *Berthold Delbrück y la Sintaxis Indoeuropea Hoy*, 165–192. Wiesbaden: Reichert.
- Güterbock, Hans G. and Harry A. Hoffner (eds.) (1980) *The Hittite dictionary*, vol. 3/1. Chicago: The Oriental Institute of the University of Chicago.
- Hart, Gillian R. (1980) Some observations on plene-writing in Hittite. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies, University of London* 43: 1–17.
- Jasanoff, Jay H. (2003) *Hittite and the Indo-European verb*. Oxford: Oxford University Press.
- Kortlandt, Frederik (1979) Toward a reconstruction of the Balto-Slavic verbal system. *Lingua* 49: 51–70.
- Kümmel, Martin (1996) *Stativ und Passivaorist im Indoiranischen*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- Meillet, Antoine (1937) *Introduction à l'étude comparative des langues indo-euro-*

- péennes*. Paris: Hachette.
- Melchert, H. Craig (1984) *Studies in Hittite historical phonology*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- Melchert, H. Craig (1992) Relative chronology and Anatolian: the vowel system. In: Robert Beekes, Alexander Lubotsky und Jos Weitenberg (eds.) *Rekonstruktion und relative Chronologie (Akten der VIII. Fachtagung der indogermanischen Gesellschaft, Leiden, 31. August–4. September 1987)*, 41–53. Innsbruck: Institut für Sprachwissenschaft der Universität Innsbruck.
- Melchert, H. Craig (1993) *Cuneiform Luvian lexicon*. Chapel Hill, North Carolina.
- Melchert, H. Craig (1994) *Anatolian historical phonology*. Amsterdam: Rodopi.
- Melchert, H. Craig (1998) The dialectal position of Anatolian within Indo-European. *Proceedings of the 24th Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 24–31. Berkeley: Berkeley Linguistics Society.
- Melchert, H. Craig (2004) *A dictionary of the Lycian language*. Ann Arbor: Beech Stave Press.
- Morpurgo Davies, Anna (1982/83) Dentals, rhotacism and verbal endings in the Luwian languages. *Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung* 96: 245–270.
- Mottausch, Karl-Heinz (2002) Das thematische Verb im indogermanischen und seine Verwandten. *Historische Sprachforschung* 116: 1–32.
- Neu, Erich (1968) *Interpretation der hethitischen mediopassiven Verbalformen*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Oettinger, Norbert (1976) Der indogermanische Stativ. *Münchener Studien zur Sprachwissenschaft* 34: 109–149.
- Oettinger, Norbert (1979) *Die Stammbildung des hethitischen Verbums*. Nürnberg: Verlag Hans Carl.
- Oettinger, Norbert (1986) „Indo-Hittite“-Hypothese und Wortbildung. Innsbruck: Institut für Sprachwissenschaft der Universität Innsbruck.
- Oettinger, Norbert (1993) Zur Funktion des indogermanischen Stativs. In: Gerhard Meiser (ed.) *Indogermanica et Italica: Festschrift für Helmut Rix zum*

65. *Geburtstag*, 347–361. Innsbruck: Institut für Sprachwissenschaft der Universität Innsbruck.
- Pooth, Roland A (2000) Stativ vs. Medium im Vedischen und Avestischen. *Historische Sprachforschung* 113: 88–116.
- Puhvel, Jaan (2001) *Hittite etymological dictionary*, vol. 5. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Ringe, Don (1998) Some consequences of a new proposal for subgrouping the IE family. *Proceedings of the 24th Annual Meetings of the Berkeley Linguistics Society*, 32–46. Berkeley: Berkeley Linguistics Society.
- Rix, Helmut (1977) Das keltische Verbalsystem auf dem Hintergrund des indo-iranisch-griechischen Rekonstruktionsmodells. In: Karl Horst Schmidt (ed.) *Indogermanisch und Keltisch. Kolloquium der indogermanischen Gesellschaft am 16. und 17. Februar 1976 in Bonn*, 132–158. Wiesbaden: Reichert.
- Schleicher, August (1861) *Compendium der vergleichenden Grammatik der indogermanischen Sprachen*. Weimar: Böhlau.
- Schmidt, Johannes (1872) *Die Verwandtschaftsverhältnisse der indogermanischen Sprachen*. Weimar: Böhlau.
- Sturtevant, Edgar H. (1933) Archaism in Hittite. *Language* 9: 1–11.
- Watkins, Calvert (1969) *Indogermanische Grammatik* III/1. *Geschichte der indogermanischen Verbalflexion*. Heidelberg: Carl Winter.
- Watkins, Calvert (1994) Il proto-indoeuropeo. In: Anna Giacalone Ramat e Paolo Ramat (eds.) *Le lingue indoeuropee*, 45–93. Bologna: Società editrice il Mulino.
- Yoshida, Kazuhiko (1987) The present mediopassive endings *-tati* and *-uaštati* in Hittite. *Die Sprache* 33: 29–33.
- Yoshida, Kazuhiko (1990) *The Hittite mediopassive endings in -ri*. Berlin: Walter de Gruyter.
- Yoshida, Kazuhiko (1991) Reconstruction of Anatolian verbal endings: the third person plural preterites. *The Journal of Indo-European Studies* 19: 359–374.

- Yoshida, Kazuhiko (1993) Notes on the prehistory of preterite verbal endings in Anatolian. *Historische Sprachforschung* 106: 26–35.
- Yoshida, Kazuhiko (1998a) Hittite verbs in *-Vzi*. In: Sedat Alp et al. (eds.) *Acts of the IIIrd International Congress of Hittitology (Çorum, September 16–22, 1996)*, 605–614. Ankara: Grafik, Teknik Hazırlık Uyum Ajansı.
- Yoshida, Kazuhiko (1998b) Assibilation in Hittite. In: Karlene Jones-Bley et al. (eds.) *Proceedings of the Ninth Annual UCLA Indo-European Conference*, 204–235. Washington, D.C.: Institute for the Study of Man.
- Yoshida, Kazuhiko (2001) On the prehistory of the Hittite particle *-ti*. *Indogermanische Forschungen* 106: 84–93.
- Yoshida, Kazuhiko (2002) Observations on some cuneiform spellings: epithetic or graphic? In: Karlene Jones-Bley et al. (eds.) *Proceedings of the Thirteenth Annual UCLA Indo-European Conference*, 165–176. Washington, D.C.: Institute for the Study of Man.
- Yoshida, Kazuhiko (2004) *Studies in Anatolian and Indo-European historical linguistics (Studies in old Eurasian languages 2)* Kyoto: Graduate School of Letters, Kyoto University.
- Yoshida, Kazuhiko (forthcoming a) Hittite *la-ga-a-it-ta-ri*. In: Meltem Doğan-Alparslan et al. (eds.) *Festschrift for Belkıs and Ali Dinçol*.
- Yoshida, Kazuhiko (forthcoming b) Hittite *pár-ḫa-at-ta-ri*. In: Dettlev Groddek and Marina Zorman (eds.) *Tabularia Hethaeorum (Hethitologische Beiträge für Silvin Košak zum 65. Geburtstag)*.

## 《要 旨》

3人称単数中・受動態動詞に生じた  $-a \rightarrow -ta$  と  $-a \rightarrow -atta$  という2つの形態変化は、ヒッタイト語の歴史時代になお働いている。この事実に加えて、 $-atta$  を持つ形式が古期ヒッタイト語にみられないこと、および多くの命令形に  $a$ -クラスの特徴が保存されていることから、 $-ta$  を持つ中・受動態動詞が最初につくられたのは、ヒッタイト語の先史のそれほど古い段階でないことが分かる。さらに、 $-ta$  が現在形よりも過去形に顕著にみられることから、 $ta$ -クラスの中・受動態動詞の多くがつくられたのは、現在語尾に生じた破擦音化 ( $*-ti > *-tsi$ ) の後とすることができる。この分析に従うならば、アナトリア祖語および印欧祖語に再建される3人称単数中・受動態語尾は1次語尾  $*-or$ 、2次語尾  $*-o$  ということになる。一般に受け入れられている1次語尾  $*-tor$ 、2次語尾  $*-to$  は印欧祖語に遡らず、アナトリア語派の祖語からの離脱以降につくられたと考えられる。

**Abstract****The Prehistory of Mediopassive Verbs in Indo-European:  
New Evidence from Hittite**

Kazuhiko YOSHIDA  
(Kyoto University)

The morphological changes in 3 sg. mediopassive endings, *-a* → *-ta* and *-a* → *-atta*, were still operating during attested Hittite history. This fact, together with the nonexistence of *-atta* in Old Hittite manuscripts and the retention of original *a*-class status in 3 sg. imperatives of many *ta*-class mediopassives, shows that 3 sg. mediopassive verbs in *-ta* do not go back to a very early period. Contrary to the generally accepted view that both *\*-to* and *\*-o* must be reconstructed as 3 sg. mediopassive endings in the parent language, *\*-to* cannot have been created when the Anatolian branch split off from the rest of the Indo-European family. The remodeled ending *\*-to* was undoubtedly due to the influence of the corresponding active 3 sg. *\*-ti* (primary ending) and *\*-t* (secondary ending). The fact that *-ta* (< *\*-to*) is overwhelmingly favored by preterite mediopassives in Hittite provides us with decisive evidence that many *ta*-class mediopassives were created after the affrication which occurred in pre-Hittite and applied to 3 sg active primary (i.e., present) *\*-ti* (> *\*-tsi*), but not to 3 sg. active secondary (i.e., preterite) *\*-t*. The morphological history of Hittite mediopassive verbs clarified in this paper shows that Hittite still preserves an archaism of remarkable antiquity which plays an important role in reconstructing the Proto-Indo-European verbal system.

(受領日 2006年7月31日 最終原稿受理日 2006年8月19日)